

パネル 2013年度せんだいメディアテークでの企画

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-05-30 キーワード (Ja): キーワード (En): Tohoku Gakuin University 作成者: 東北学院大学文化財レスキュー班 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/362

ごあいさつ



東日本大震災から3年10カ月が経過しようとしています。震災一年目のあの困難な毎日、行く先の見えないなかで復興への思いだけが先走っていた二年目、停滞感があせりへとつながりつつもそれが日常化してきている三年目、わたしたちはそれぞれの毎日を歩んできました。今ほど、「私たちのくらしはどのようにかたち作られ、どこへ向かっていくのか」をみずからの問題として考えたことは、かつてなかったのではないのでしょうか。

3・11以降、国立博物館や全国の文化財関係者、さまざまな分野の研究者を動員して文化財レスキューが行われてきました。宮城県内の現場は50カ所を超える甚大な被害でしたが、現在は被災現場でのレスキューからコレクションの保全・復旧、そしてミュージアムの再興へと作業が移っています。



東北学院大学では、大学博物館を拠点として、牡鹿半島に所在していた石巻市鮎川収蔵庫の考古・民俗資料のコレクションを受け入れました。現地から運び込まれた量は、四トントラックで八回分。大破したコレクションのクリーニングと保全作業は、学生たちの力で進められてきました。資料が安定した状態になるには、あと一年ほどの作業が必要と見込まれています。

現在、私たちが取り組んでいるのは、「牡鹿半島のくらし展」というプロジェクトです。これは被災して仙台でお預かりしている資料を、地域の方々に見ていただく展示会の形式をとっていますが、実は身近な民俗資料がどのようなくらしのなかで使われたかをインタビューによって調査することが目的です。レスキューされた古い生活資料が、今を生きる私たちと思い出を介して一本の糸でつながる。そのつながりの糸を何百本にも増やして束にしたとき、「ひとり一人のくらしの姿」が見えてくるはずです。



町が復興し、人々が仮設住宅から復興住宅に移ったあと、ふとかつてのくらしに思いをはせてみたくなる時期がくるでしょう。そのときにミュージアムは真価を問われるはず…。

堅苦しい話はさておいて、なつかしいくらしの道具からはじまる、みなさん一人ひとりの「物語り」を聞かせてください。

東北学院大学文学部准教授
加藤 幸治

